

特240

631

わ み

集文賞鑑作創童見



..... 6



始



文章修行の二大道

校長 吉田 豊治

立派な文は作らうとて作れるものでない。それは全く必然に生れ出るものである。恰も人あれば影が地上にうつるのと同じである。人大きければ影が大きく、人小さければ影も亦小さい。人が立派であればその影たる文は自ら立派である。人を大きくすること、即ち自分を太らせること、えらくなること、これが文章修行の第一道。

人が大きくても光がなければ影はうつらぬ。光が強ければ強いほど、影はハッキリする。吾等の周囲には、萬物萬象があつて吾等を照さうとしてゐる。しかし吾等の心の眼が開かなければ、決して照してはくれない。心の眼を開いて萬物を観、萬象を感じて、それを意味づける人こそ、世界を自分の中に生かす人だ。斯くてこそ、その人は周囲から強く／＼照されて、ハッキリと濃い影を地上に印する。即ちよい文が生れる。路傍の小草、微風のそよぎにも、心の眼の開き方によつては無限の意味を感じる。これが文章修行の第二道。

「もつとく、數多く書け、少くとも一週間に一篇以上は是非書け、書いていく間に、必ず綴方の力は上達する。上手だとか下手だとかいふやうな事にか、はらないで、すんすん書いていく、其の間に、世間でいふ所謂こついはゆるがわかつていく。」

かういふ事を私は深く信じて、其の實行を皆さんに大いに御す、めしたいと思ひます。

試に、四月以來今日まで第一學期中に、自分は幾つ文を書いたか考へてみてごらん。二十以上、少くとも十五以上書いてゐる人があるならば、其の人の綴方の力は、必らず相當の進境を示してゐるに違ひありません。

皆さんも、はや知つてゐる通り、綴方は自分の生きた心の姿を、文字文章といふ形をかりて表現するものですから、表現すべき心をしつかりと捉へ、その捉へた心をまともに現はすべき文字文章を選ぶといふ事は、なかなか難しい事で、それには非常な苦心勞作を要します。

所が此の綴方にとつては最も大事な苦心勞作、此の苦心勞作によつてのみ綴方の力が進

むといつてもよいものを、いごふ人が多い。是をいごふて綴方が上達する苦はありません。

文を多く書くといふ事は、此の苦心勞作をくり返し經驗する事であります。

文章に對する知識が如何程たくさんあつても、又文章に對する理窟が幾ら述べられてもそれだけでは、決して立派な文はつくられません。立派な文をつくる基は、文を多く書いていく間に、即ち其の苦心勞作の間に体得する所謂こつこつであります。

文を書く勞作をいごふのは、多く、上手だとか下手だとかいふ事にかかはつてゐるのではないかと思ひます。上手だとか下手だとかいふ事にか、はると、どうしても筆の先がにぶつて思ひ切り書けない事になり、つい書く事が仰山になつて、書けなくなります。殊に上手下手にかかはると、綴る心のすなほさがなくなつて、心にもない事を書いたり、上面な事を無理に書くやうになります。

上手でも下手でもよい。自分の書きたいと思ふ事を、大膽に文字文章に盛つていく、とにかく、數多く書くといふやうにせねばならんと思ひます。

○……………一
 ○……………二
 ○……………三
 ○……………三
 きんぎよや……………四
 えいざんじまいり……………四
 あやめ池へいつたこと……………五
 ウチノアサガホ……………六
 ふしぎなかめ……………七
 しんるいのおばあさん……………八
 蚊帳……………九
 僕は一錢銅貨です……………一〇
 夕ぐれ……………一二
 夕ぐれ……………一二
 内の七めんちやう……………一三
 猿まわし……………一四

ねこ……………一五
 ねずみのしがい……………一七
 あやめ池遊覧地で……………一八
 梅雨……………一九
 ひろむちやんの病氣……………二〇
 うらやましい旅行……………二二
 夕やみ……………二六
 ゆききする牛……………二九
 夕べの話……………三一
 一年前……………三三
 妹の話……………三四
 五月二十三日初夏の雨上り……………三六
 旅行に行かれない私……………三七
 別れ……………四一
 うのゑちやん……………四三

みわ児童創作鑑賞文集

三輪尋常高等小學校編

○ 尋一 シンドウマサユキ
 ボクトジンチャント、ヒライシクント、ツジ
 モトクント、ヘイタイゴツコヲシテキマシタ。
 ヒライシクンガ、
 「ボク、オホサカデ、カツテモラウタ、ラツ
 バヲモツテクルハ。」
 トユハハリマシタ。ソレデボクガヨロコソデ
 「モツテキ」
 トユイマシタ。ヒライシクンガ、スグモツテ

キヤハリマシタ。ソレデ、ボクガミンナニ、
 ボウヲカシタツテ、ソレヲケンニシテ、ボク
 ガタイシヨウニナツテ、ヒライシクンガラツ
 パソツニナツテ、ツジモトクンガ、タイホウ
 ヲウツヒトニナツテ、ミンナドンドンユハシ
 テキマシタ。

評 平石クンガ「ラツバチモツテクルヲ」トイハレタト
 キ、アナタノヨロコソダヤウスガ、ヨクアラハレテ
 井マス。
 ニコニコシテ「モツテキ」トイツタノデスネー

○ 尋一 ハタナカフミヲ

ボクトニイチャント、オトウサンニ、アヤメ
イケへ、ツレテモラツテ、ミワノエキヘイッ
テ、オカシンヲ、コオテモラツテ、エキヘキ
テ、ゼニヲダシテ、キツブヲコオテ、キツブヲ
ツンデモラツテ、キシヤノクルノヲミテキマ
スト、キシヤガキマシタ。ボクトンオトウサ
ンガ「ソバヘイタラ、キシヤニヒカレマス」ト
ユイマシタ。キシヤガガタントユイマシタ。
ボクハビツクリシマシタ。ボクトンオトウサ
ンガオシロヲモツテクレマシタ。ソレカラ、
ノツテ、ムギハラボウシヲスイテキシヤノマ
ドカラノゾイテ、ホオボオミテキマシタ。ア

ンマリミテメエヘホコリガハイリマシタ。キ
シヤヲオリテ、デンシヤニノツテ、アヤメイ
ケヘツイテ、ボオトヘノツテイキマスト、ア
ヒルガフネノオシロニツイテキマシタ。オシ
ロヲミマスト、アヒルガキマシタ。クロトシ
ロトキマシタ。ボクハアヒルヲシイトオイマ
シタ。アヒルハガアガアトナイテニゲテイキ
マシタ。ボクハ「モツトナケ。ナイタラオカシ
ンヲヤルカラナケ」トイツテモ、アヒルハシラ
ンカホヲシテ、ニゲテイキマシタ。ボクハア
ツサリトイツテ、アタマヲカイテイマシタ。

評 ミンナソロツテ、アヤメイケヘイツタコトヲ、クハ
シクカイテ井マスガ、コトニ、オシマヒノハウハオ
モシロイマス。

○ 尋一新 甚吉

キノフヒルカラ、ノグチサント、ヒライシ
サントボクトサンニンガツコウヘキマシタ。
オギハラセンセイガ、カバンヲトツテキテト
イハレマシタ。ソレデボクラハオギハラセン
セイノ、チャノカバンヲトニイキマシタ。
スルトセンセイハ、アリガトウトイハレマシ
タ。ボクラハウチヘカヘリマシタ。ソシテノ
グチサン、ボクトコホリヲタベマシタ。ソシ
テアソビニイツシヨニイテ、ウチヘカヘツテ
ペンキヤウシマシタ。

評 ウマクカクマシタ。コホリハ、オイシカウタテセウ

○ 尋一 辰巳アイ子

キノフ、ハヤクオキテニハヲハキマシタ。
ソシテゴハンヲタベルト、ネエチヤンガアキ
チヤンヲダイテキマシタ。ワタクシガペンキ
ヤウシテキルト、オカチヤンガキテ、ナニシ
テイルノトタヅネマシタ。ワタクシハペンキ
ヤウシテイルネトイヒマシタ。ソレカラヒル
ゴハンヲタベマシタ。ソシテコヲオウテアソ
ビニユキマシタ。ウチヘカヘツテエホンヲカ
イニイテカヘツテホンヲヨミマシタ。

評 ハツキリカケテ井マス。エホンチカウテ、ウレシカ
ウタテセウネ。ドンナエガカイテアリマシタカ。
コンドハ、ソレチウマクカイテクダサイ。

午後のじゆぎやうがすんでぼくはうちへかへつてべんきやうをしてゐますとちよつとねむくなりました。するときんぎよやが「きんぎよやい、きんぎよ、おながきんぎよ」とねむそうなこゑをたててぼくのうちのかどをどほりました。それでぼくはよけいねむくなりました。ぼくはそのきんぎよやのきんぎよをかつてほしいなあとおもつておかあさんに「きんぎよをかつてください」といひますと、「そんなものいらない」といひました。するときんぎよやのこゑはもうきこえなくなりました

それで又あしたもくるやろとおもつて又一し
ようけんめいにべんきやうをしました。

評 お母さんが「そんなものいらない」とおつしやつただけですか。なにかほかにおいひになりませんでしたか。おかあさんのおこぼれをきいて、あなたはどう思ひましたか、そんなこゑを、くはしくがいてください。そしたらもつとよくなります。

えいざんじまいり

尋二 金井 一二

ぼくはおとつひおとうさんとおちいさんと
ごじようのえいざんじへまいりました。ふる
いお寺があつてお寺のよこにたて石がたつて
あつて、又そのよこにいしごうろうがたつて
ありました。あちらへ行くどつりがねがぶら

さがつてありました。おちいさんはそれでご
うんど、たたきました。するときながいどりひ
びいてゐました。それでおちいさんはよこに
あつた木をみますとをののたうふうのじがか
いてありました。それからごじようのえきで
きしやにのつてかへりました。

評 つりがればどのくらひの大ききでしたか。ごうんと
なるご、お父さんもあなたもだまつてきいてゐまし
たか。そんなこゑをたくさんかいてください。

あやめ池へいつたこと

尋二 島岡 良子

私はにちようび、しんるいのおばさんらと
一しよにあやめ池へ、につこうはくらんかい

をみにゆきました。中へはいるとないふもお
びもいろいろうつてゐました。そのうちでひ
ごりでだんすをするおにんぎよをうつてゐる
のをみました。一人の女の人がやかましくい
ひながらうつてゐるのがおもしろうございま
した。いろいろなものをみてゆきました。そ
してにんぎようでこしらへたむかしのぎよう
れつをみますと一ばんさきにさむらひがいき
ました。そのあとからおとのさんがうまにの
つていきます。大せいのけらいもついていき
ます。むかしのおとのさまのぎやうれつはう
つくしいものやつてんなあとおもひました。
それからそこをでるとこんどは日光のひぐら

らがおほいので、つひ、いらぬことまで書くものです。このさくしやは、よくものをみてゐます。「にんぎやうのぎやうれつ」のころなど、うまく書いてゐると思ひます。そしてむだがありません。

ウチノアサガホ

尋二 安田 清子

ウチノアサガホハコノアヒダ小サナツボミガノリマシタ。ワククシハスコシヨロコビマシタガ、モチツト大キナツボミガノツテホシイナアトマイニチマツテキマシタ。ソレニイツマデタツテモ大キナツボミガノリマセンノデヨクミルトソレハエダガオレテイマシタ。ソレデボウヲタテヤリマスト、マタモトノトホリシヤキントシテキルノデワタクシハヨ

しのもんがこしらへてありました。きんでびかびかひかつてゐました。左じんごろうのねむりのねこもまねしてほつてありました。はくらんかいをでて、ぶらんこやかいてんきにのつてあそびました。あんまりのつてめがまはつたのでいすのところでちよつとねてゐました。こんどおきてぶらんこにのると、おちかかりました。またいつぺんにおりました。それからおもちやのうまにのつてゐました。すこしたつてから、わたしらはまたでんしやにのつてかへりました。そして、きしやにのるときしやはぼうといつていきました。

評 いろいろふこを書かうとするときには、書くこが

ロコンデキマス。ガクコウヘクルトキ、キタダノトナリニ、ウスモモイロヤ、モモイロヤムラサキガキレイニサイテイルノデ、ワタクシハ、ハヤクウチノアサガホガ、サイテホシイトオモヒマシタ。

評 ナニチカカウトシタカガ、ハツキリワカル文デス。

ふしぎなかめ 尋三 島岡 永

昔内のおばあさんが、よその内から、小さなかめをもらひました。おとうさんが、おばあさんに、「内のせんすいの所があるでせう。あそこでかめをかひませう。」といひました。おばあさんは、「ハハハハ」ときふにわらひなが

ら、「そんな事をしては、いけません。」といひました。かめは、それをきいたのかぞろぞろとあみだ様へあるいてゆきましたから、おばあさんは、二ひきそのかめをおひかけて、これ／＼といつて、かめをつかまへました。「そのかめをみわへきた後ぐうじ様にたのんで、みやうじん様の池へはなしてもらひました。その後十年もたつたので、かめのすがたをみたいといつて、内のおばあさんは、日曜日にいさんと、みやうじん様へゆきました。すると、ぐうじ様は、しぢめ様へはなしたとおつしやいました。二ひきもしぢめ様へはなして、おやりになつたこのことでびつくりし

て、しちめ様へいそぎました。すると、大きい池のよこの上から、長い松がたふれていま

しんるいのおばあさん
尋三 泉 春雄

したから、そこを見ておりますと、もらつたかめよりすこし大きいかめであつたので、内のおばあさんは「これ／＼かめさん、口ではいへないけれど、なにかふしぎな事をみせてくれ」といひますと、かめはくびをあるだけのばしてきれいをして、手をふり上げました。すると、おばあさんは「かめさん、よくふしぎな事を見せてくれた、さよなら」と、いふと手をふつて池の中へはいつてゆきました。

評 うつくしい姿を見るやうな文です。おばあさんもかめも、いき／＼と書かれてあります。つづりかたは、じぶんのしたことだけでなく、こゝろいふところに目をつけるのも大それたことですよ。

ぼくのしんるいのおばあさんは、つるがに知られます。そしてぼくを、かわいがつてくれます。又つるがへいくと、なにでもかつてくれます。そのおばあさんは、はがぬけてゐてあたまのかみはまつしろです。それでみんなは「まつしろけ、まつしろけ、まつしろなたま」といつてわらつています。そしてうちへきても春雄さんといつて、かわいがつてくれます。ごはんをたべる時でも、さるのやうにしてたべますからそのうちのにいさんもわらひます。又あたまのけはまつしろですから

おばあさんがさんばつやへいつて、かつてもらひます。そしてうちへかへつてくると、「ばんさん」と、いわれてゐます。なかなかけがばえないのでそとへ出られません。

あさんがいちばんすきです。

評 おばあさんの、いかにもお年よりらしいすがたが、上手に書かれてあります。自分のみた事ばかりでなく、よその人が、其のおばあさんにいふことも書いているので、この文はよくわかるのです。

蚊 帳

尋三 平澤 チツ

ある日のことおばあさんがそとへ出ました。すると村のひとびとはわらつていました。又上のほうからおとうさまがひかつてるごいひます。それでその人によぶのは、「きんきあたま」とよびます。又、あたまの上のひかつているところへはいがとまれば「ちよつとすべる」と、わるぐちをいひますが、そのおばあさんは、しらんかほをして、わらつてうちへはいつていきます。ぼくは、つるがのおば

そろ／＼あつくなつてきました。それにつれて、あのうるさい蚊がどび出してまいりました。ごこの家でも蚊帳を出してつるし初めました。私の内でも此の間古い蚊帳を出してつることにしました。私らがねる時つる蚊帳は二十年ほどまへ、まだお母さんが十才ぐらひの時おぢいさんがおかひになつた物で、ひさしいあひだ、お客様のある時だけつるすこ

ごにしてなほしてありました。私らがだんだん大きくなつて、今までのかやでは小さすぎるといふのでこれを出してまいばんつるす事にしてゐます。白のあさでヘリが赤のもすでひもは竹色と赤とをよりあはせてそこへひらうちのかんがついてゐます。ちよつとさわつてもさら／＼として氣持がよろしい。私はね

どこへはいつてのび／＼とねた時「もしこのかやがなかつたらぶん／＼蚊にせめられ、とても一ばん中あふいでもいられないしかくすべもそんなに出来ないし、小さい妹や弟たちが蚊にさ、れてないたりしてほんたうにこまるだらう」と、かんがへるとだれがこんなちや

ほうなものを作つて下さつたのか、はぢめてこんなものをかんがへ出した人には心からおれいひたいやうな氣がします。あつい夏のばん蚊にもさされないのでらく／＼とねられるのであるからあくる日學校へくればよくべんきやうせねばならないと思ひます。

評 心をばたらかしても物を見ることは大それた大切なことです。さすればだれでも書けさうで、この作者でなければ書けないところがあります。
一ばんおしまひのことばはないほうがよいと思ひます。

僕は一錢銅貨です

尋三 土井 一夫

僕は一錢銅貨である。みよう字は昭和三年で名はすなはち一錢銅貨である。生れたこき

ようは、大阪のぞうへいきよくであつた。なつかしいこきようをはなれてはじめて、大きなごふく屋の人につかまへられて、せに箱の中へは入ると、僕の兄弟や、友達がたくさんは入つて居たので、僕はうれしかつた。出るものもあればは入るものもある。次は、僕の出るばんかど、楽しんで待つて居た。或日の事に、田舎のおばあさんがごふく屋へ来て、反物を買はれた、おばあさんは、きんちやくから僕の兄さんをたくさん出されたので、僕はおつりに出た、するご、田舎のおばあさんは、僕をつかんで、きんちやくへ入れ、そして、汽車にのつて、はる／＼と三輪へ来た。

子どもがみたらしを買ふのにつかわれ、又さかなを買ふのに、つかわれたが、僕にはさかなを買ふだけの力がないので、兄さんの二十錢など一しよに、さかなの一匹と取りかへられた。さかな屋のおばあさんは、なまぐさい手をつかんだ時、僕はまことにいやだつたが、きんちやくへは入ると、僕の兄弟も、友達がたくさんは入つて居た。其の時きんちやくに、穴があいて居たので、ころげおちて、ちりんとひめいを上げた。けれどもさかな屋のおばあさんはちつともしらなかつた。今でもまだ僕を見つけない。

評 時々そういふ文を書くのもよいことだと思ひます。

夕ぐれ 尋四 植田 好子

だん／＼西の空があかくなつてきた。私は六時に夕はんをいただいてから、せんざいに出了ました。しゆうかいぎの葉は、つゆにぬれてゐる。そこへ日光がさしてゐるので、葉は、きら／＼ひかつてゐる。

私は、ほんとうによいけしきだから、ぼんやりと、西の空を見てゐると、「よしちゃん、／＼」と、ごこかで、ねえさんのこゑがした。あたりを見まわすと、にかいからねえさんがよんでゐたのであつた。

私は、八時ごろ表へ出て、西の空を見上る

と空には、たくさんな星が、空一面に、かがやいてゐた。

評 「しゆうかいぎう」は、よくあらはれてゐます。

「ほんとうによいけしきだから……」さいふごころは、もつとよくみなければいけません。

夕ぐれ 尋四 川辻フサノ

私が夕はんをすまして、表へ出てすみえんですわつて、ぼんやりしてゐるとごこからかほたるが私の目の前へこんできました。とらうとしたらもうほたるはごこかへいつてしまひました。私はぼんやりたつてゐると空には星が二つ三つでてゐて、そしてその星の光はあちらへとぶように思ひます。やあといつ

ていると、あしになにかさしたやうでしたので見るとかがたべたのでした。さうしてゐると風が南からふいて來かので、やあといつてうちへはいりました。

評 「星の光」はよくあらはれてゐます。ほたるを取らうとしたまごころは、もつとくはしく書いてほしい。

内の七めんちやう

尋四 西條 武雄

僕は今日學校からかへつてみると、うらやでなにかちゆんちゆんといふなきごえがきこえてきた。僕はなんだろうかと思つてちかよつて見るとそれは、とりのようでくびが長くてくびのところだけ、けがありませんでした。

僕はなんだろうかと、かんがへてゐると、ふと思ひだした。さうだこれは此の間お父さんがとりやさんにたのんでおかれた七めんちやうだといひながらかばんをかけておいて、せりをこつて來てやるご七めんちやうはよろこんで、ちゆんちゆんとなきながら一しやうけんめいにたべてゐた。僕はこの七めんちやうが大きくなつたら、どんなに僕になれるだろうかと思つて毎日七めんちやうにせりをやる。七めんちやうも、よろこんでたべているので僕はうれしい。

僕は學校にいても七めんちやうの事を思ひだしてしかたがない。

評 せめんちやうについては、まだく書くことがありませう。もつと長い文を作るやうにけいこして下さい。

猿まわし 尋四 下馬 敬助

或日お使の途中で猿まはしを見た。猿は面白くおどつたり、めんをかぶつて、おどりまはつたりして、人を笑はせた。猿まはしのおぢさんは、たいこをどんどこくた、いて「猿のしりはまつかいで、これはかにをだまし、たばちに、栗がばちんとはねて、おしりに顔にあたつて、こんなにもつかいになつたのさく。」と面白くいつて笑つてゐると、猿はおどつたいこをほつたりせに箱をほつたりし

て、むちやにしてゐた。しばらくすると一匹の猿が出て来て、にらめつこをするやうに、大きな目を向ひ合してゐる、猿まわしのおぢさんは「猿の兵隊ごつこだ、小さい方が家來で大きいのはお大將さん、らつばを吹くまねごつこいしやう、どんどこく」と、たいこをた、いてから「皆さん、ちよつとよけて下さい」といつて人のまはりへ丸を書いた。猿はざりより出ると出た人をおして同じやうに丸をかいた。ふと思ひ出したはお使の事だ。急いで市場へいつて、お魚と青物を買つて外へ出た。市場の中は珍らしい物がたくさんあつた。早く歸つて猿まはしを見やうと思つて走

つてくると終いがたであつた。それをみてゐて面白かつた所は皆手をた、いて猿をほめ立てるのでにぎやかであつた。僕等もしまひに一錢玉をせに箱に投げてやつたらうれしそうにおじぎをした。猿まはしのおぢさんが歸る時僕等は猿とおぢさんを見送つてやつた。

評 この文の作者はよく物を見てゐます。綴方を上手に書かうと思へば、あらゆる物事によく注意することが大切です。

ねこ 尋五 島岡 明

あたりがうす暗くなつて來た。天理さんのたいこが、どんどことなり出すと、向ふの畠の方から白いものが、こちらを向いてやつて

來た。

弟はねこやくと、言ひながら内の中へはいつて、がらすしやうじの間からのぞいて居ました。ねこは、ごなりの屋根へ登つて、目をうすく光らせながら、にやんくと鳴いてゐました。

僕は、ねこが大きらひであるから、そばにあつた土のかたまりを取ると、いきなりねこをめがけてなげつけますと、ねこはタツと、はしつて草の中へかくれました。

弟は庭へ出て來て、僕のそばへ來てゐねむりをして居ました。こんどは僕が「ねこ來た、ねこ來た」と、言ひますと、弟は目をさまし内

の中へはしつて行きました。今度は桑の土手の方から目を光らせながらこちらへやつて来た。もう僕もこんどは、こはくなつて家の中へこんではいつたが、ねこは、こちらを向いて居るので、こはくそばにあつたぼうを持つて追つかけてました、ねこは向ふの畠の中へ姿をけした。

「やあ面白かつた」と、思つていねむりをしてゐましたら、兄さんが「あれ見、あこにねこ二匹よる」と、言はれたのでその方を見ると、黒と白のまだら色のねこ、真白いねこが、にやあ／＼と、鳴きながらもみぢの木の上へはしつてのぼつた。さつきから三度ねこが來

たので、こはくて／＼と、びく／＼して居ました。しばらくして、ねまの中へはいつて便所へ行かうとした時に、便所の屋根でさつきのねこが、にやあ、にやんと、けんくわをして居た。

僕が手を洗ひに行くと、又そこにもねこが居たので、一生懸命にはしつて、内の中へはいつた。

僕はもうこれからねこに石や土をあてたら悪いと思つた。

評 よくましまつてゐます。きらひなれ、こに對する感じが、かなりあらはれてゐます。

ねずみのしがい

尋五 松村 圭子

鍬の先で捨てられたねずみの骨ばかりの姿、所々に皮がついて眞黒になつたねずみの屍を見るなり、「やあ見にくいものだ」と思つたが、しせんに、「あ、かわいさうに、あのねずみにも大事な命があつたのだ」と、思ふと、人の一生のはかなさも思はれる。俵の米や洗米を思ふ存分たべて人からにくまれるねずみにもやはり大切な命があつたのだ。あ、さうだこの間あまりねずみが多いので、ねこいらすをきれいなだんごの様に見せ、それをくはせてねずみを退治しられた事がある。其の時に何匹

ともしれないねずみがしんでしまつた。そういふねずみは、きつと米をたべて來て、其所にあるねこいらすをよいだんごがあると思つて喜んでたべ、その上水をのみ、のどをやいて今私が見たやうな姿で、あの世へ行つてしまつたものだ。其のねずみはすい分大きかつた。きつとかはい赤んぼうを残して行つたらう。これから其のかはい赤んぼうはどうして行くだらうか。

このねずみが悪いのではない。きつと悪いせんぞをもつたため、このやうな見にくい死方をしたのだらう。

私にはこんな事が思はれた。

評

「そいふれずみは……」「其のれずみは」さいふ言葉は、最初作者が見たれずみさ、別である様な感じがします。れずみの死がいた見た時の有様をはつきり書きなさい。どこで見たか、だんごをどの様にしておかれたか、さういふことを思ひ出してごらんさい。文は産むもので、無理に作らうとしてはいけません。

あやめ池遊覧地で

尋五 琢磨 貢

僕と山口の兄さんと、あやめ池へいった。

着いてみると、多せいの人たちが、遊んでゐました。

僕等は一番先に、池へボートに乗りに行った。兄さんは、「一時間たつたら知らせて下さい」と言はれた。

僕と兄さんと二人で一そらのボートに乗つ

は、「一箱買ふ」と言われたので、あさい方へこいでいった。

「マッチありますか」といはれると、「今ありません」と答へたので、むこうへこいで行かしたら、いくらこいでも、いのかないのので僕が、おりて少しおしてどびのつた。むこうで、よその人に、兄さんは、たばこの火をつけさせてもらつて、すばくたばこをすすひすひ、こいでくれた。やがて一時間たつたのでボートからおりてこんどは、ぶらんこに乗りに行きました。僕が乗つて、兄さんにおしてもらふと、たいへんよいきもちがしました。こんどは、すべりに行きました。上からす

一八

た。兄さんは力が強いので一ぺんこごと一問ほども進む、兄さんは、僕に「この池の周りは一里ほどある」と教へてくれた。

むかうを見ると、ひろくとしてゐて兄さんの言はれた長さはたしかであつた。

兄さん一人にこいでもらつて一回廻つて来た。こんどは僕が、一方のかひをもち、兄さんは、他の方のかひで、かじをとつてくれた。

僕がこごと水の上の方をなせるだけである。「もつと力をいれてこいでみ」と言われたので力一ばいこごと少し進むやうになつた。

その進んだ時、何ともいへないほど、うれしかつた。マッチがなくなつたので、兄さん

うと下つてきて又上つてすべつてきてから、兄さんは「ちゑちやんにごんなんを買ふてかへつたらか」と、いつた。そしてセルロイドの中に、じんたんをいれてあるのを買つて電車で奈良へいつた。

評 スラ／＼書いてゐます。もつと其の時の氣分をあらはす様に書けば、一層よくなつたらう。

梅 雨

尋五 喜多 静江

梅ノ實ノ色ズク頃ハ、ホトンド毎日ノヤウニ降り續ク。時々ハヤムが大低ハ曇リ勝デ日光ヲ見ル事ハ稀デアル。室内ハ何時モ夕暮ノ様ニウス暗ク着テキル衣服モスワツテキルタ、ミモジメ／＼シテ氣持ガ悪イ。シカシ細イ雨

一九

ノ絲ガ庭ノザクロヤ紅葉ノ若葉ニフリカ、ル
トソレラハアザヤカナ色ドリヲ見セル。雨ノ
晴間ニ見ルカキツバタ、アヤメノ花ハサツバ
リトシテ美シイ。垣根ヲハツテキルカタツム
リモ梅雨ノ庭ニ一種ノオモムキヲ添ヘル。少
シ小降ニナツタノデ表へ出タ。朝顔ノ葉ノ上
ヲカタツムリガノタリ〜トノンキサウニハ
ツテキル。オ庭ヲ通ツテ、モノホシザヲノア
ル所マデユクトサヲノ下ニツユガ一パイタマ
ツテキル。一寸フクト一度ニハラ〜ト音ヲ
タテ、地ニオチル。又雨ガザア〜ト音ヲ立
テ、フツテキタノデ又家ヘカヘリエン側カラ
梅雨ノ風情ヲ眺メタ。

評 前半と後半とが、はなれん〜になつてゐます。
後の様な書振の方が、氣持がしつくりするでせう。

ひろむちやんの病氣

大野 信夫

昨日まで元氣にあそんでいた、むかひのひ
ろむちやんが、今朝急にねつが出て苦しがり
ました。おばさんはびつくりしてすぐ氷をか
ひに行かれました。そして近所の人がたくさん
ん見舞に行かれた。

僕も學校へ行きしなに、いつて見ました。
僕が「ひろむちやん」といつたら、苦しさに
こちらを見ました。それから僕は學校へいつ
てもあのひろむちやんの苦しさをなかははわ

すれられませんでした。今ごろはどうしてゐ
るだらうかと、そんなことばかり思つてゐた
ので、二時間目の授業時間には頭がいたくな
つた。僕はそれで机にもたれて休んでゐた。
三時間目には讀方だつたが、まだ頭がいたく
てからだがおこせなかつた。四時間目の授業
もおはつて僕はごはんをたべにかへつた。か
へるなりすぐ、ひろむちやんの家へ見にいっ
た。「ひろむちやん、ちつとはねつが下つたか」
といふと、おばあさんが、「うん、まだ同じや」
といはれた。それからごはんをたべる時お母
さんは「さつきひろむちやんのねつをはかつ
て見たら四十五度あつた。」といはれた。僕は

びつくりした。「なんぼなんでも四十五度もあ
るとは思はなんだ」といつた。それから又急に
僕の頭がいたんで來たので、ひるからは學校
を休んだ。お母さんは、頭をひやすために氷を
買ひに行つてくれました。頭をひやして四時
頃までねてゐたが、ひろむちやんの事が氣に
か、つたのでいつて見た。僕が「ひろむちや
んどうや」といつたらちよつと笑つただけで
した。それからかへつてごはんをたべて風呂
に行きました。風呂からかへつてからおもて
であそんでいるとおばさんが「大野さんきい、
氷やるわ」といはれたので僕が行くとひろむ
ちやんは、ふごんの上におきなほなほつて、

にこ／＼わらひながら、「大野さんきい」といひました。そしておばさんに「ひろむちやんは生れてから何へんほど病氣にならつた。」ときくと「生れてはじめてや」といはれた。僕は「そんなに丈夫なひろむちやんがなせ病氣になつたのだらう」ときくとおばさんは「川にはいつたり、はだしではしりあひをしてたさかひや」といはれた。もう大分なほりそうになつてゐる。僕ははやくなほつて又いつしよにあそびたいと思つた。ひろむちやんの病氣はあした位になほるだらう。

評 「文は人なり」といふ言葉があるが、この文を讀むと作者はどんな心の人がよく分る様に思ふ。あらはし方には不満足も少くはないがその態度はよい。

目にあふだろう、そしていくらいつたつておもしろくはないでせう。」といわれたので私もそれはそうだなあと思ひながら、うつむいていたが、又お母さんが「こんど伊勢へ行かないでも、又夏休にでもつれていつてあげますから」といろ／＼いつて下さいますので私も「では行かんどこ」と、思ひあきらめてしまひました。

それから、日に／＼お友だちらが旅行のことをいつてにこ／＼わらひながらあそんでおられます。「私も行けたらどんなにうれしいだろう、なせよふのだらう」といつもお友だちのお話をきくたびにかなしくてしかたがあ

うらやましい旅行

尋六 吉田 京子

ある夜のことでした。お夕はんをすますとお母さんが「お前今度伊勢へ行くのだが和歌山へいつた時にもよつたように、今度伊勢へいつたらよけいにようだらう、ゆかれないかもしれないなあ。」といわれた。私はかねてより旅行々々たのしみになつておつたのに、こんなことをとつせんきかされると、ぞつぞつしてむねがはりさけるようになった。けれども私はむりに「私それでもいくわ」といひました。お母さんは「もしお前よつたらどうするの先生にめいわくかけ、又お前もくるしい

りませんでした。そしてだん／＼と近づいてくる旅行はいやになりました。

いよ／＼旅行の二三日前、みんな旅行のお金をもつてきられたので、私も思はずいきたくてたまらないようになりました。そして自分のようにつく／＼かなしみました。そしてみんなのうれしそうなみなりや、かほをみると、心の中で泣きました。そして七日の日のことでした。地理の時間色々旅行についておしへて下さいましたが、私はゆかれませんからこんなものをきくのはいやでなりませんでした。そして先生がおもしろいことをいわれてみんながたのしそうにわらふのを見る

ご、うらやましくてなりませんでした。自習がすんでからも、私だけかへるようになったが、もうかなしくて、いきたくてたまりませんでした。いよ／＼八日の朝となりました。目をさまして、見るとあたりはまつかになつて、すすめがちゆん／＼ないてゐます。私は「もしゆけたらけさはどんなにうれしいだろう、おいしいべんとうをさげて、たのしい／＼といつてゆかれるのに、よわくない人はどんなにうれしいだろう。」と色々どねまの中で考へるのもうたへられなくなるくらいです。お母さんが「こんなによい天気であるとみんなもよろこんでやるやろ」といひ乍ら私のねて

いる所へきられたので、私もすぐおきました。かみをくくつて外へ出て見ると、もう大分きておられて、たのしそうにあそんでおられます。そして今やたのしい／＼たびに出かけようとしていられます。私はゆきたくてなりませんでした。あさはんをたべてからも色々することが思ひうかべられて、ゆかれたらといくら思つたかもしれませんでした。いよ／＼勉強しようと思つて、机の前にもたれても、今ごろは汽車の中でもだちどうし、おしやべりをしたり、さわぎたてたり、たべたりしてゐるのが、目にうつるように、頭の中におこつてきて、勉強どころかこんなことばかり

考へてゐました。夜になつても今ごろは夕食をすましてたのしくあそんだり、又今ごろはみんなならんでねながらも、色々のことを話合ひつつ明日のことをたのしんでゐることが考へられ、むねが一ぱいになつて、自分のからだにしかるよりしかたありません。その夜はそんなことを思ひながら、いつの間にかゆめの世界へしすかにはいりました。

朝になつて空をながめて見ると、どんよりどくもつてゐます。私は思わず、もし私が伊勢へ行つてゐる時にあのうつくしいお日様をおがむことが出来ないで、このような天気だつたら」と思ひながら「あゝ、お天気になつ

たらよいが」と思つておりました。けれども朝ごはんの時に今ごろはお友だちが、たくさんならんでおいしそうにごはんをいただいてゐるだろう、あゝ、どんなにうれしいだろうかと色々かんがへられて又「私もいつたらどんなにたのしいだろう。どんなにおもしろいだろう、けれどもよふてくるしみながら、お友だちがたのしいごはんをいただいてゐるのに、自分だけがやどやのねごこにねてゐるなど考へると、やはりゆかなかつた方がよいなご、色々心がかかります。あさはんをすまして今日は一つ勉強してやろうと思ひ、机にすわりました。そして色々のことを考へなが

ら、いつものように勉強しました。けれども一頁よめば今ごろはとうしてゐるだろうなあと思ひ、一頁ほどかくと又今ごろはもう汽車の中でたのしくあそんでゐるだらうなどと、なんども／＼思ひ出されてしかたがありませんでした。そのうちに天氣になるように空があかるんできたので、私もほつと安心しました。そしてぶじにみんながかへつてきて下さいと、心の中で一心にいのりました。

もうじき夕方になるので私もあのよういらやましかつた旅行も、とう／＼すんでしまつてもうじきみんなも、つかれ足をひきすりながら、かへつてくるだろう、私ももし、い

つたとしたら今ごろはもうじき三輪だ／＼といつて、さわざだしてゐるだろう、私もよわなかつたら、旅行にもゆかれて、さぞこの旅行もゆかいにゆかれただろう、みんなもさぞうれしかつただろう、色々考へてなんだか心の中がしずかになつたような氣がしました。けれども、私はよふのにつく／＼かなしみました。そしてよわない人はどんなにこうふくだろうといくら思つたかもしれません。

醉 感じが生々々出てゐます。よい文は必らず深い感じから生れるものだと、しみ／＼思はれます。題さ内容がピッタリ合つてゐます。

夕やみ

尋六 厚芝 保一

なはてづたひに急いで行く。兩側の田には

水が一ぱいみなぎつてゐる。苗はもうすいぶんのびてゐる。蛙が兩側から音楽のやうに、ぐわあ／＼となき出す。

初瀬川の橋の上に立つ。雨の爲か、水はすいぶんふえてゐる。僕の胸位の深さがあるだらう。青い清い水は、ちやうど木津川の清流のやうだ。

うちの田へ来た。父は豆の種子をうえてゐる。弟もてつだつてゐる。僕の足は走り出した。

「兄ちゃん、来たん。」

「うん。」

「保一、さらの下駄、田へはいてきて。」

父は田のなはてにくわで、こつ／＼とあなをつけて行かれる。四年の弟が小豆の種子をまいて行く。二年の弟が土をかぶせる。僕が灰をまいて行く、面白半分によつてゐたのがいつか本氣になつてゐた。少しして、僕と四年の弟とかはつた。そして行列のやうに種植をつづける。

ふと氣がつくと今や太陽は西山に近づいてゐる。そこらの雲々は、黄色に、朱色に、紅色に色ざられてゐる。美しいなあ。

僕はあれを見ると、色々なことが思ひ出される。小さい時は、「夕焼、小焼、明日天氣になあれ」と歌つて、遊んでゐたものである。

現在僕の心は、そんなのんきな心にもなれない。のんきであつた幼時がこひしくなつてくる。それから、夕焼を喜んだ死んだ弟、活動寫眞のやうに、次から次へ考へさせられた。

夕方の雲をやぶつて、日光が田の面を黄色に、朱色にかざやかせてゐる。眞赤なく七月の太陽、あゝあの色、こんな所を圖書にでもかいたら、ミレーのやうな、のんびりした繪も出来るのだらう。

太陽はつひに、西山にのまれる。西から北にかけて黄色の雲がほのじろく帯のやうに廣がつてゐる。雲の黄色、朱色、紅色もあたりをおそふ夕やみに黒雲の大軍につゝまれて行く。

あたりはうすぐらい。田の面がきらりと白く光るだけ、それに静、たゞざあくど川の水。たつ、たつ、たつ。くわをかついだよその小父さん。

「すいくわどうだつせ。」

「あきまへん。」

「すいくわ、うえかへするのあらしまへけ。」

「あらしまへん。わしごんかて、一本かれましてん。」

父は話をしてゐられる。しばらくそれを聞く。

僕は弟と、田のあせにすはつてゐた。お、今、東南の空から月が上つた。さへにさへた

美しい月。

流星の如くやみをかすめた一つのほたる。

ぐわ、く、く。

ぎやあ、く、く。

があ、く、く。

蛙の音楽も一そう盛となる。

「いのう。」と弟の聲。

「歸ろう。」と父の聲。

評 作者は一生懸命に書いたことがよく分ります。そしてつくり物をみてゐます。唯、難ないへば、作者の感じたり、思つたりしたことを、皆書かうとした爲に、多少ゴタ／＼してゐます。さほど重要でないことは、おしめます。書くべきことは、強く書く様にしなければなりません。うまく作らうと考へるよりも、自分の心と、文との間にシツクリしないところがないかを考へるべきです。句の終りをわざとブツリ止めてゐますが、あまりいゝことではありません。

ゆききする牛 尋六 南元 あい

日はかんくごあたりをてらし、かげろうは一面にもえてゐる或日曜日の日中の事です。私と、おばあさんが、まごから、あたりをながめてゐると、私の家の門を牛をつれて、しらぬ男の人がほんどうに、たえまなくこいつてよいほど、西へ西へこつれてゆかれた。其牛の中には、朝せん牛もおれば内地牛もいて、さもうるるさそうに、おとなしそうに口から白いあわを出し、ほそい足で、のそ／＼と行先へ足をはこんでゐる。そこについてゐるおじさんも、しりつまみをして、つえをも

つて、「しいく」と眞赤なやけつくような顔をして、牛と共に我家へど、かへられる。私は不思議に思つてよこにゐられたおばあさんに、今日にかぎつて、「なせこんなに牛が通るのですか」といつてたづねるとおばあさんは「もうついお百姓さんの家では植付がなから、其前、田へ水を入れなければならぬが、まだ先に田をたがやさねばならない、それで牛をつかつてたがやされるから家へ牛をつれてかえられるのです。」といわれましたので、私は、「それならば此の牛はどこにゐるのですか」とたづねると、「それは此の牛を家においておくと、たべものがたくさんいるから

山中へあづけておくと、山中は草や、たべものが澤山あるから、牛のたべものは充分であるから、あづかれるのです」といわれたが私はまだ充分がてつんがいかないのので「それではあづかつた方はお金をもらうのでせう」とたづねると「いや／＼お金はもらわないのです。それであづかつた方は、牛をつれて山へしばかりにつれていつて、よくはたらかすからそれでも／＼だ」といわれたので、よう／＼私には、がつてがんで、私もおばあさんも奥の方へいつた。

そして幾日かたつた朝、私は學校へ行こうと思つて門を出た。すると、いつか見おばえ

た牛をひつばつてゐる、白がのおじいさんが今も前とおなじように、しりつまみをし、つえをついて山中へ行かれる。牛は、今の中は元氣よさそうにあるいてゐるが、だん／＼向ふへゆくと、きつと口から白いあわを出すのだらうと思ふと、かわいそうになつてきたがどんこつに行く牛の事を思ひかえしてみるとこの牛の方が、づつと、ごくだと思ふと少しもかわいそうには思はず、早くいてこいといふ氣がおこりました。

評 い、題材です。赤い布をつけて貰つて、山中へ預けられて行く牛には、頗りしてやりたい様な可憐さがありますね。おばあさんとお話してゐるところは、少し言葉が多過ぎます。

夕べの話

尋六 植田 利野

お父さんの歸つてこられるのをいまか／＼ごまつてゐました。妹をだいて町の方へ行くご、兄ちゃんか「お父さん歸られた」と、言はれたので、見るごお父さんは青木のお菓子屋へは入られた。私は妹をだいたま、は入つて行くご、お父さんは何かお菓子を買つておられました。そして妹に二つ三つ、もたせて下さつた。妹をだいてもらつて薬のこうりを持つて歸つた。そして夕食を食べてゐる中にこんな話が出ました。それはお父さんが、薬を賣りに行つてゐる間にあつた話で、「十九才

の娘さんがおられるが、ひばちのふちへこし
をかけておられて、お父さんが行くと『お金
がないのです』と、言はれるので、お父さんが
『どこかでかりて来てくれたらどうぞへ』と言
はれたそうです、すると其の娘さんは『お母さ
んがいられたら何所かへ働きにでも行くのに
お父さんは、脳が悪くてねておられます。そし
て私は、心臓が悪くて何もする事が出来ない
のです。よそへ働きにでも行けば、十才の子
と七才の子とで御飯もたく事が出来ないし、
お母さんが居られたらと、どんなに思ふかし
れません』と言つて泣くのだそうです。其の
話を聞いて、兄ちゃんは一薬やつといいたらよ

の家のやうにお母さんがなくなられたとし
たら、今は私達は、どうしてくらしてゐるだ
らうなあ、色々な事を考へて、どうもねむ
事が出来ませんでした。

あ、これから後、其の人はどうしてくら
して行かれるだらうなあ、何かめぐんでやり
たいものだと思ひました。

評 父の話によつて、作者はあわれな娘さんを知り、心
から同情を寄せてゐるよい文です。

一年前 尋六 加見 秀信

僕とお父さんは、夏休に大阪へ行つた。そ
して三日ほごしんるいの家であそんでゐたが
父は用があるといつて、うちへかへつた。僕

いのに』と言はれました。私もさう思つてゐ
たから、兄ちゃんがさう言はれると、なほさ
らさう思ひました。どうしてお父さんは何故
「何所かでかりて来てくれと、」言はれたのだ
らうなあ、その者は皆、くたり、くはなんだ
りして苦しんでゐられるのに薬をあげればよ
いになあ、話ぶりを聞いてゐると、非常に
かわいさうだと言ふやうに言つておられるの
に、何故だらうなあ、考へるとつくづくこ
お父さんの言葉に對してはらが立ちました。
ねやうと思つても、今頃はどうしてゐるだ
らうと思つて、少しもねむる事が出来ませ
んでした。其の中に又妹の事も考へられ、そこ

はさびしくあそんでゐたが、毎日ルナパーク
や、新世界、樂天地、朝日座にいつてゐたが
つれがないので、ちつともおもしろくなかつ
た。或日僕等は、櫻島へ行つてかへつた時、
ざしきの方から、お父さんのこゑが聞えて來
た。「おや、なにしにこられたのであらう。前
になせうちへかへられたのだらう。」だがうれ
しい。今まで一人ぼつちであそんでゐたが、
お父さんがこられたときと、うれしくてた
まらない、ざしきの方へ行くとお父さんだけ
と思つたのに、中學の山田君まで来てゐた。
お父さんはすぐ僕につれができてうれしいや
ろと言はれた。山田君はあつそうに、はんけ

ちでかほをふいた。そしてそばにあつた氷を二人でたべた。僕は、たべ〜「もうすこし早くきたら、櫻島へ行けたのに、」と言つた、すると山田君は「せやけど今きただけやさかいにの」と言つた。僕はお父さんに「なせ前にうちへかへつたんで」ときくと、お父さんは、おほぎでかほをあふぎながら、にこ〜してゐられた。それから夕はんをすましてすこしたつてからどこについた。翌朝父は三輪へかへつた。僕は山田君と、二人で毎日川へ海邊へ、又夜は、中ノ島公園へ行つて、二人でたのしくあそんだ。こうしてたのしく又ゆくわいにあそんだことは、五日もつといた。

それから山田君は、兵庫縣の西の宮へ行つてくると言つた。行く時に一しよに行こうといつたが、僕はむこふへ行つたらはづかしいと思つて行かなかつた。そしてもと通り一人でさびしくあそんだ。

評 「一年前」さいふ題はどうか思ひます。綴方は「こんなことがありました」と知らすだけでなく、自分の感じがうまくあらはれてゐればなりません。それには筆をさる前に、自分の感じをハッキリさせておかれねばなりません。

妹の話

尋六 平澤 智美

「裕さん、まだ〜学校へいけないな、わたしもうじきに行くねで、学校へいつたら、どの先生にならふと思ふの」

「千枝ちゃんどの先生にならふのすき」

「どの先生でもよいわ、柘植先生は家へきやはるからしつてるし、女の吉岡先生は小さい姉ちゃん、ならつたはるからしつてるし、高田先生でも、柘植先生が、池田の内へいかはる時、うちのかごでまつたはるやろ、それでしつてるわ、男の吉岡先生は、せに宗の刀美男さんとこへこのあひだきやはつて、裕さんにお菓子あげようといははつたやろ、それであるの先生もしつてるわ、それでどの先生にならつてもよいわ」

「それでも千枝ちゃんどの先生すきで」

「わし三輪の学校の先生やつたらどの先生で

もすきやわ」

「……………」

学校へ行つたら野原や山へ行つて、勉強さしてくれやはるし、ぶぐわもかけるし、折り紙も教へてくれやはるしえ、な、裕さんかて早く学校へ行きたいやろ、色紙で、ちやうちんやら、おしへてもらつたらもつてかへつてあげるわ、それで仁さんどとりやいしなや」

「はい」

青葉のしげつた日のあまりあた、かないすゞしい木かげにむしろをしいて、小さい妹や弟は色紙を折つたり、汽車や、電車のおもちやをもつたりして、こんな話をさもうれしそ

うな顔をしてかたりあつてゐる。私はこの話を聞いて、又學校へ行かない子等には、どんなにたのしい事か、先生はどんなによいお方か、きつとうちよりも、お父様やお母様よりも學校や先生がよいと思つてゐるのでせう。自分も小さい時はそう思つてゐた。しかし私は柘植先生より他の先生は知らなかつた。私等の學校へ行くのを見てきつと、早く行きたいな、千鶴さんの手工を見ては、あんなを早くするやうになりたいとおもつてゐるのだらう。そう思つてゐるせいか繪本でも一年生といふ雑誌でもこのごろは、よくよめるやうになつてよろこんでゐることがある。こんな

に學校はたのしい所だ何でもわからない所をよくわかるやうに先生はおしへて下さるとたのしんでまつてゐる。そのたのしい學校へ千枝ちゃんくる時には私はもうゐないかもしれない、私と妹とかよつたやうに、又千鶴さんと千枝ちゃんとかよふことでせう。お内このこつた裕さんと、仁さんとは又やがてこんな話をくりかへす時がくるでせう。

評 實に瀟々たる書振です。ここに會話は上手に出来てゐます。スラ／＼と書いた様であるが、どの言葉にも作者は充分心を働かしてゐます。よく讀んで下さい。

五月二十三日初夏の雨上り

尋六 中村 弘夫

しび／＼と細い銀線のやうな雨が降つて居

るのに、僕等はおにごくをしてゐる。頭もシヤツもびつしよりとあせばんだ上に細い雨が加かると、ぬくいあせとまじつて長い毛の先から、ぼたり／＼としくが落ちる。ぬるま湯のやうになつた雨がほほをつたつて落ちてくる。

僕等は雨がやめばよいのと言ひながら空を見れば、うすすみ色のくもが東の方へ風に吹かれてとんで行く。

雨がだん／＼やんできて、三輪山からも南の山からもふわり／＼と水じよう氣がそらへ立ちのぼつて行く。

今はすすしい風が吹いて、

あせばんだあとがうすら寒い。

評 詩的に書かれた快い文です。こゝろいふのがドシ／＼作れる様になれば立派なものです。題から受ける感じはあまりいゝさはいへません。外によい言葉を見つけてごらん下さい。

旅行に行かない私

高二 竹中アイ子

「まあ十日ある、八日ある。」と、指折りつつ日數數へて楽しんでゐた旅行に、愈々となつてから、行かれないことになつてしまつた。始めは、母も、

「始めての伊勢旅行だから、行く方がよい」と言はれてゐた。

それからといふものは、母が

「あれし、これし」と言はれると、
「ハイ／＼／＼」と、平生よりも二倍も三倍も
すなほに立働いた。此の間も

「愛子」

と呼ばれたから、

「ハイ」

と返事をするなり飛んで行つて、針箱を引く
りかへして叱かられた。が、ただ旅行に行か
れると思ふ、喜びの心がこもつて、かへつて
其の怒もそのやうにこわくなかつた。

母の機嫌を損ふてはいけないと思つて、
いい加減のじようだんを言つて、母を笑はし
て居た。又こそりと着物の縫上げをしたり、

手帳をさがし出したり、色々旅行の準備に取
りかかつては、ひとしれすほほるみをもらし
てゐた。

所が或夜母が電燈の下で、裁縫をして居ら
れる時、

「愛子、お前この間、奈良へいつた時、よふ
てしんどなつたやろう、あんな近い所でも、
よふのやつたら、伊勢みたいな遠い所やつた
ら、きつとよふてしまふわ、まるでしんどし
んに行くやうなものやさかいにいかんとき」
と言われた。

母は私の爲に言つて下さるのかしらないが
私にはかへつて私を憎んでいふておられるや

うに思つて、何にも有難くなかつた。

私はなさないやら、腹がたつやらで、無
念の涙をのんでそれに反對をとなへた。

「めつたによふけ……よふたつて、お前に世
話してもらわへんやつてんかまいな」
と口ごたへをした。

しかし母に對して、強い言葉を出したも
の、實際考へてみると、心配でならない。

去年和歌山へ行つた時の車中の苦しみを思
ひ出しては、いかんごことまでも思はれる、
私の心は「いかんごこ」「いこう」と言ふ二つの
心に燃え上つてゐる。

二つの中のごちらにしたらよいだろうか？

こんどは二つの心の良し悪しにまよふてしま
つた。

やつぱりいかんごこ、もし行つて先生に世
話になつたらいかんし、どう／＼いかんごこ
と決心したが、やつぱり思ひきれない。

それからの私は母に、仕事を言ひつけられ
ても返事だけしておいてなか／＼仕事にとり
かからない。

ある日母が

「愛子」

と呼んで居られるのに私は聞へてゐないふり
をして、大きな聲で讀方の本を讀み始めた。

母もあまりの態度に、あきれかへつて何に

もいわないで自分でしておられる。

学校へ来ると、友達等は教室の隅にかたまつて

「一所に寝よや」

「あんた、どんな着物着て行くの……たもとか、つつそでか。」

と口々にたのしい旅行の話をしてはほほ……と笑つて居られる。

私はただなんのたのしみも、喜びもなく、そばに聞いてゐるものの、胸には針をさされるやうな思ひがする。

よわなければゆかれる旅行も、よふがためにゐられない、かと思ふと憎しいやうな氣が

して自分の身の上をあはれむのである。

明日が旅行だといふ晩、寢床へ入つたものの、むしや／＼してねられない、明日の旅行の事がおもひ出される。

友達等が楽しく、よい着物に、はかまをはき、勇んで家路を出て学校へ急がれる所が、夢に現に、まぼろしに、ゆかれない私をば、あざけり笑つて喜んでおられる所、楽しみのぞみを乗せた汽車は終に野山をすぎ、川又川を越へて山田驛について居られる所、五十鈴川に口をすすぎ、外宮、内宮へ参拜して國家の安泰をお祈りして居られる所、内宮の苑内に大山大將奉獻の大砲と東郷大將奉獻の

大砲とを見て明治三十七八年戦役の事を想像して居られる所、宿屋へついて色々の、談

話をして居られる所、寢床の中でまくらのほりやいをしたり、足でけりやいをして先生におこられておられる所、空にさる渡る月をながめて、ふるさとの事を思ひ出していたがつて居られる所、二見ヶ浦の波打ざわで日の出を見ておられる所、向ふにみえる小島へ大波小波が打よせて、ぎんたまがびか／＼光つてあたかも繪のやうな所、鳥羽港へいつて軍艦や、水らいていを見て居られる所、海岸を散歩しつつ四方の風景を眺めて慰安の心をおこしておられる所、

まるで走馬燈の如く、私ののうりをかすめて行くのである。

評 旅行に行けるを喜んで、ソハ／＼してゐる氣持や、行くなと言はれて、ツンとしてゐる様になど、仲々よく書いてあります。寢床で、色々思ひめぐらしてゐるところは、もう少し書いた方がよろしいでせう。

別れ

高二 上田 良雄

いよ／＼兄さんの晴の出發の當日となつた兄さんは、徴兵検査に目出度合格し、更に海軍兵に選拔され、吳の海兵團に行かれるのである。

今日で兄さんとしばらくの別れかと思ふとなんだか心が沈む。学校は半日でおはつてかへつた。時は刻一刻／＼と進んで出發の時刻

となつた。我等は手に手に旗を持つて兄さんを送つた。

大勢の見送り人が後からぞろ／＼とついて来る。何だか面白いやうな、勇ましいやうな、兄さんの事を考へて物思ひに沈むやうな感じでした。

明神様で町の人々への別れと、入團への祝福の式をして驛へ行つた。

プラットホームへすーと並んだ。汽車は勢よくついた。兄さんは汽車に乗つて窓から首をだされた。「ビー」と車掌のふいた笛は最後の別の笛だつた。

汽車はうごいた。「萬歳／＼」と旗をふつて

兄さんを勵げまして下された。兄さんは「眞面目にしつかり國家守護の大任をはたして來ます。みなさんさらば……御見送り有難う。」と元氣よく帽子をふつてゐた。母はこれを見て泣いた。快活な父は「目出度い／＼」と云つてゐる。

汽車は一秒／＼速力を増して三輪の里を離れた。

御見送りの方々はお歸へりになつた後の驛の構内は静かだ。

評 其の時の様子が、分ることは分るけれども、感じはあらはれてゐない。説明しやうとせず、兄さん、見送りの人々等が、どうしてゐたか、其の様子を書かればならぬ。文字、言葉によつて、其の有様を寫すのです。さうしたら、感じは其の中に自然にふくまれます。

も立ちません。

其のかはり腹の立つた時、いくら強く叱つても、平氣で笑つてゐるばかりです。又大變滑稽な子で面白半分によく人をなぶります。時々私の内へもだましに來ます。

「御免」

「はい」

「ちよつと玉子賣つとくなはらんか……はは」と飛出して行つてしまふ。

私であれば、うのゑちやんの聲は、分つて居るから、だまされないが、何も知らない父は、こうして時々だまされます。私の内ばかりではない。自分の家へも同じ事、

うのゑちやん 高二 櫻井とらゑ

うのゑちやんは、今年三年生です。組の中でも一番背が高くて、私とくらべてきて、あまり差がない程です。所がなか／＼のちよけんほうで、私等の組の子にきらはれる事がありません。

私は、此の子の眞の心は悪くはない、唯子供らしい快活さが過ぎて、こんなにちよけるのだと思つてゐるのです。其れ故大變可愛らしい所もあります。私には姉のやうになつきません。根が小供好きな私は、うのゑちやんが少し位悪さをして、怒りもしなければ、腹

「御免」

「はい」

「おだいつさんのせんげんまつ上げとくはらんか」

「はい〜」

と、お母さんまでがだまされて、お米を取りに行かうとなさつた事もあります。

又や、子のやうに可愛い所もあります。或日も私の家へ来て、

「わい此處の子になんね」

と言ひ出したので、母は面白がつて、

「わしとん子になつたさかい、これやろさ。」

と菓子差し出された。何時もなら自分から

「くれ」と言つて取るのに其の時にかぎつて、
「いらん」

と言つて笑ひながら表へ走つて行きました。きつと、之をもらふと、ほんたうに此處の子にならなければならぬと思つたのでせう。なんと子供らしい無邪氣な子でせう。

又うのゑちやんと私とは大てい日は一諸に風呂へ入ります。私が先にすました時でももう一べん入りと言つて、だづをこねます。風呂へ入れば、ながしてやります。時には、面白いお話をおしへてやる事もあります。すると大變喜んで、

「姉にもおせたつて」

と言ひます。

私が何處かへ行かうとすると、

「つれていて」

と言つて飛んで來ます。田へ仕事をしに行く時でも……そして手傳つて來れます。

川の岸へでも行くと、面白がつて、

「うのゑちやん、わい川へまるは」と言ふと、

「いらん、はまんね」

「いらんはまんね」

「いらんはまんねえ」

と私を引つ張ります。やつぱり可愛らしい所あんなと思ひます。

此の間、私が自習時間に林檎の味と言ふの

を読みました。其の中には「或人が、百姓爺さんに、『お前死んだら何になる』と言ふと、『死んだら土になるだあ』と言つた。作者は此の素朴な一言の中にも爺さんの幸福さが満ち〜てあると思つた」と有りました。之を思ひ出して、一つうのゑちやんにも聞いて見てやらうと思つて、

「うのゑちやんお前死んだら何になる」

「土になる、せやろ違ふけ」

と言ひました。やつぱり土になると答へたなど、一人笑つてゐました。少しして

「お前土になつたら、え、け」

「かなんは、こねんして踏まれんなんもの」

私は何とも言ふ事が出来ず、唯笑つてゐました。

うのゑちやんについては、まだく面白いう事があります。

評
うのゑちやんが紙上に躍動してゐます。作者の筆は心憎い程自由にのびてゐます。よほど物を観る態度がしつかりしてゐる。だから浮いた言葉、何等の響を持たぬ言葉はなく、その一つくがヒシ／＼してゐるのです。三讀四讀されんことをぞみます。

兼好法師は「思ふこと言はねば腹がふくれてゐる様で氣持が悪い」といつた。自分の思つたこと、感じたことは、言はずには居れぬ様でありたい。筆を持つことを大儀に思つてはいけない。筆まめといふことは何よりも大事である。

「文はやりたし書く手は持たず」これでは困つたものである。

さいふは度々開けば、それにつれてお金がへる。文を書くことは、それと反對に書けば書く程、よい考が泉の様になつてくる。

よい文を作るには

吉村 虎夫

此の文集をつくるについて、皆さんの文をいろ／＼讀んでみました。そして、どの學年の子もそれ／＼力一ぱい文を作つて居られることが分つて、うれしく思ひました。しかしその中には、綴方はどんなに書けばよいのだといふことが、分つてゐない様なものも見當りました。一たいどうすれば綴方が上手になれるのでせう。又どんな文がよい文でせうか。こゝにいふことについて一二感じたことを聞いて頂かうと思ひます。

皆さんは、綴方の題をきめる時、一生けんめいに考へてみななければなりません。題一書くことがらゝは、決して外にあるものでなく、みんな心の中にあるのです。よく自分の心と相談するのです。そして、一番書きたいと思ふこと、これを書かねば、承知出来ぬといふ題をえらばねばなりません。

心に感じてゐることを書くのは、嘘の文です。そんな文は死んだ文です。私達は、生きた文を書かねばなりません。それには、作者の心が生きて居らねばなりません。心が生きてゐるといふのは、「しつかり見たり、感じたり、考へたり」することです。くごい様ですが、書く前に、必らず自分の一ばん、ねうちのあることを探してみなければなりません。此の心から作られねば、決してよい文は生れません。

一つの文を書き上げると、それを幾度も、直してみなければなりません。皆さんの文には、非常にこれが足りない様に思ひます。
昔或る人が

板の間に下女取落すなまこかな
とよんださうです。すると先生が、これではあまりゴタ／＼しすぎる。もつと、かんたんにせよと言はれた。そこで

板の間に取落したるなまこかな
と直した。先生はそれでも、未だよいと言つて下さりません。そこで
取落し取落したるなまこかな

と改めました。そこで先生は、はじめてはめて下さつたさうです。「下女」とか「板の間」とかいふ言葉は、なくとも「なまこ」の生命はあらはれるのです。要らない言葉をなくして、要る言葉を多くあつめる、これは大そう大切なことです。

「朝早く起きた」と言はずとも、「まだ電燈がともつてゐた」と書く方が、はつきりするし、「暑い日だ」といふのを「ふいても／＼汗がにじむ」といふ方が暑さをよくあらはしてゐるでせう。さういふ點に氣をつけて、これ以上直すところがないといへるまで、直してほしいと思ひます。

編輯後記

○種々の事情で、去年一年間發行を休みました此のみわも、其の長い歴史と誇をすてるに忍びず、此處に再び發行する事の機を得ました。従前通り年三回、毎學期末に發行する事に致します。

○本號は再生最初のみとして、全体にいささか物足らない氣はせんでもありませんが、學年によつては相當よい作品が少くはありません。休みの朝夕に、しつかりと味つて下さい。

○愈々楽しい夏休みがまゐりました。此の一月をどう暮さうかで、皆さんの心は定めしおどつてゐる事でせうやがて九月になつて、休み中の生活の文が様々に現はれて来る事を楽しんで待つてゐます。

○本當に夏休みこそは、綴方のおけいこに、最もよいときです。子供の頃の夏の記念塔としての綴方を立派に築き上げて下さらん事を

衷心より御祈りするさうにも、此の一月を無事に過されん事を御祈り申します。

昭和三年七月廿五日印刷
昭和三年七月三十日發行

(非賣品)

編輯者 奈良縣三輪尋常高等小學校
兼發行者 磯城郡

右代表者 吉 田 豊 治

奈良縣磯城郡三輪町大字
三輪二百六十八番地

印刷者 檜 垣 嘉 藏

奈良縣磯城郡三輪町大字
三輪三百七十一番地

印刷所 三 輪 文 明 社

全縣全郡全町全字五百四
十五番地ノ一

終

